

一体宗純の詩・頌と能：享受者の記録として

著者	田口 和夫
雑誌名	能楽研究：能楽研究所紀要
巻	19
ページ	103-124
発行年	1995-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10114/00020465

一休宗純の詩・頌と能

——享受者の記録として——

田口 和夫

はじめに

一休宗純（明徳五年1394—文明十三年1481）の詩・頌の中に能を題材にしたものがあることは、古くから知られているが、吉田東伍博士が『能楽古典禅竹集』（能楽会、大四）に「一休題頌」と題して、能に関係する十一首を収め、解説を付せられて以来、金春禅竹・宗筠父子との交渉、ことに禅竹の禅的教養という面で言及される事が多かった。野々村戒三氏編『金春十七部集』（春陽堂、昭七）にも解説なしで同じものが収められていることも、その傾向を助長したであろう。この関係について見直されたのは表章・伊藤正義両氏による『金春古伝書集成』（わんや書店、昭四四）においてであって、一休と禅竹との関係について

両者の関係が明らかになるのは、応仁元年九月、一休が乱を避けて薪の酬恩庵に入り、その頃禅竹もまた薪の多福庵に住して以後のことである。それも、一休の『狂雲集』に「題江口勾欄曲」と題して収められる七絶が、金春宗家蔵の掛物などに、

有時染色、貪着思不淺、又有時聞声、愛執心弥深、心思口云、妄染緣成者、現也皆人六塵境迷、作六根罪、見事聞事、迷心可有之、右金春遊客江口歌題之頌曰、

見色聞声吟興長、明心悟道没商量、

愁人不識普賢境、歌吹樽前總斷腸。

応仁二年二月日

南浦六世孫臨濟正伝東海純一休書于薪酬恩庵以与禅竹老僧者也

という形で伝えられていたこと、また、『一休和尚年譜』の応仁二年の条に、「秋書示多福庵禅竹薪在之今春大夫也法語一通」とあるのが、兩人の間に交渉のあったことを示すのみで、必ずしも確実な資料とはいえないものである。禅竹の禅的教養が一休との接触に由来するかの如くいう従来の所説は、極めて根拠が薄いと言わなければならない。(七四頁)

と述べられている。この事は、伊藤正義氏『金春禅竹之研究』(赤尾照文堂、昭四五)が諸資料を引いて俗説の信じがたいことを説かれ、禅竹と一休との交渉については、応仁元年(1467)以降の可能性は高いとされる。従って、禅竹の没年(文明三年1471以前)までの数年間がその期間と考えられることになる。また伊藤氏は宗筠・禅鳳の能と一休の詩との関係に触れて、「これは(一条)兼良の場合と同じく、禅竹との交渉が子・孫の代に引継がれたものと見てよいと考えられる」と述べられている。現在のところ一休と金春三代との関係についてはこの両書の説によるべきであろう。

本稿では、一休の詩・頌を能楽史の一資料として扱うこととする。従って、一休自身にとって能を詩・頌の対象として取り上げることがいかなる意義を持つか、金春三代にとって一休との交渉が何をもたらしただのかなどについては、すべて別稿によることとし、ここでは具体的に詩・頌のどの部分が能のどの部分と重なるのかを検証し、能楽史

資料して位置づけられることを証したい。

禅僧と能

禅僧と能役者とのかわりかは能楽論あるいは能の禅的色彩を論じるときに屢々触れられることである。世阿弥と宝陀山補巖寺二世竹窓智巖との交渉については香西精氏『世阿弥新考』第一章「世阿弥の出家と帰依」(わんや書店、昭三七)に詳説されるごとくであるし、その世阿弥が小男だったという興味ある情報も禅僧たちの能についての談話の中にでてきた話柄であった(森末義彰『中世芸能史論考』東京堂出版、昭四六)。禅僧が能あるいは能役者に相応の関心を抱いていたであろうことは、推察に難くないのだが、それでは彼らが自身の作品の中にそれらを描いているかというところではない。

例えば観世小次郎信光の伝記資料として有名な「観世小次郎画像」賛を書いた景徐周麟の「翰林葫蘆集」(『五山文学全集』第四輯)を見ても、賛を依頼されて執筆するということをしていながら、信光や田楽・猿楽の能に関する内容の作品は他に見あたらない。(ただし、これも依頼されての作と思われる田楽役者遊阿弥についての「遊阿弥画像賛」はある。これは勝定院足利義持に寵愛された田楽役者松阿の子遊阿八十四歳の肖像だという。松阿は「文安田楽能記」で狂言を演じている松阿と見られるから、田楽史にとって有益ではある。)

恣意的に例を挙げるが、萬里集九の「梅花無尽蔵」第二(『五山文学新集』第六卷)に見える次の作品は画賛ではあるけれども能そのものを知らなければ書けないものであろう。

百万舞図(長享元年作)

伝聞百万奈良娘 羯鼓声中烏帽狂 桜子恋耶桜子恋 不知花在釈迦堂

能〈百万〉の詞章、「奈良の都に百万と申す者にて候」・「古りたる烏帽子ひき被き」とそれぞれ対応している。第四句も「嵯峨の大念仏」を親子出会いの場としているのだから当然釈迦堂という事になる。ところで、横道にそれるが、第二句「羯鼓声中」によれば百万は羯鼓を着けていたと見られる。古型付類も現在の演出も羯鼓を用いることはない。それではこれは絵空事かと云えばそうも言い切れない。「七十一番職人歌合」の第四十八番に見える曲舞々は烏帽子を被り鼓を横に置いている形で描かれているからである。百万も女曲舞だから羯鼓を持って囃す演出がなかったとは言えないと思う。第三句は「あらわが子恋しや」に対応している所だが、「桜子」という子供の呼び名が問題になる。能〈桜川〉では失われた子の名は「桜子」である。〈百万〉では「わが子・みどり子」と言うだけでその名を呼ぶことは無い。万里の表現からすれば、「あら桜子恋しや」というように謡われていたと解したい所である。問題が残る部分である。

万里の作品は画賛ではあるが、能の詞章と直接に対応するところが見える珍しいものであった。そのほかには第三上に「春睡 南豊山方丈元宵会」(明応二年作)と題する次の詩がある。

翻案都曇答騰来^{トウトウタラリ} 鼻端拍子起春雷 余音湧作三郎鼓 一々皆花無不開

「元宵」は陰暦正月十五日の夜だから、その時の催しに〈翁〉があったのか。居眠りしていたのが三郎の鼓でびっくりして目を覚ましたのであろう。能を描くことが目的ではなかった。能そのものを描いてはいないが、能とかかわりがあるのは次の通りである。第一「関東太田道灌扇子賛」に「一声不用三郎鼓 舞袖紅輕影自花(扇面有歌舞之宴)」、第一「湖上遠山図(有一人乗舟、有一郎鼓舷)」として「眼裡西施一髮山、棹郎後鼓画船閑、功成帰去五湖月、白鳥未猶知此間」。これは陶朱公を描いたものだろうが、第四句は〈船弁慶〉の「功成り名遂げて…五湖の煙濤を楽しむ」とかわらう。第二「江上春望」(文明十八年作)は「道灌静勝公、招福鹿両山諸尊宿并小年、浮画船数艘於隅田川、詩歌鼓

吹、一時之壯観」という長い注が付いて、「十里行舟浪自花、春遊不覺在天涯、隅田鷗亦応都鳥、鼓吹晚来入霞」とあり、「隅田在武蔵・下総両国之間、路傍小塚有柳、道灌公為攻下総之千葉、構長橋三条」と注する。「路傍之小塚有柳」が気になったのは、能〈隅田川〉による知識があつたためと考えてよいであろう。第三下「山呼万歳者三」（明応八年作）に「唯非鼓答臘都曇^{タラリトウトウ}」とあるのは「春睡」と同想。第四「取弓判官画賛二十韻」に「申楽田楽 琵琶調残」とある申楽は能〈八島〉と見られよう。「梅花無尽蔵」を通観して、能関係と考えられるのは以上である。万里集九が能あるいは謡いに親しんでいたのは確かであろう。しかし彼には能そのものを見ての、観能記ともいうべき作品はなかったのである。万里の作に寄り道をすぎたかも知れないが、これと比較してみても、やはり一休は特異なのである。

一休能関係頌・詩一覽

一休の詩・頌と能との関係についてまとまって説かれたのは、中本環氏校注の新撰古典文庫6『狂雲集 狂雲詩集自戒集』（現代思潮社、昭和五二）の解説においてである。これは「狂雲集」は頌偈の集であり、「狂雲詩集」は詩の集であるとの観点による分析だが、そこで能を題材とするものを「狂雲集」に二首「狂雲詩集」に十五首見いだされている。次にこの指摘を含めて、能と関係すると考えられるものを一覽しておこう。『禅竹集』に指摘されているものには（吉）、中本氏の指摘されているものは（中）と注記しておく。本文と番号は中本氏のものによる。訓読は中本氏のものがあるときはそれにより、（ ）内に私見を加えた。下段には詩句と関わる詞章を記した。（ ）で括ったのは間接的な関わりを示す。

「狂雲集」

82 山路 讓羽

山路 讓羽

注〈山姥〉岩波思想大系『中世禪家の思想』補注88

吞声透過鬼門関

声を吞んで透過す鬼門関

(寒林に骨を打つ、靈鬼泣く泣く前生の業を恨み……)

豺虎蹤多古路間

豺虎蹤多し古路の間

万箇目前の境界、懸河渺々として巖峨々たり)

吟杖終無風月興

吟杖終に風月興無し

黄泉境在目前山

黄泉の境は目前の山に在り

思想大系の市川白弦氏の注によれば、嘉吉二年(1442)初めて丹波の讓羽山に入り、民家を借りて住んだ時の偈という。他のものと様相を異にし、詩句の直接の關係はない。

280 題江口美人勾欄曲

江口美人勾欄曲に題す

江口

(吉)(中)

見色聞声吟興長

見色聞声吟興長なり

ある時は色に染み、貪著の思ひ浅からず、またある時は

明心悟道没商量

明心悟道は商量を没す

声を聞き、愛執の心いと深し、……げにや皆人は、……見る

愁人不識普賢境

愁人は識らず普賢の境

事聞く事に迷ふ、……すなはち普賢菩薩と現れ、

歌吹樽前総断腸

歌吹の樽前総べて断腸

禅語としての「聞声悟道 見色明心」は中本氏の解説に見えるが、また45の題にも見える。〈江口〉の詞章はこの禅

語を踏まえて作られているが、「見色」で「明心」とはならず、かえって迷いが深くなり、「聞声」もまた同じ結果となる。もとの意味が分かっていないとこういう表現はできないであろう。別にまた45には「雲門拈じて云く、觀世音

菩薩錢を將ち来って胡餅を買ひ、手を放下して曰く、元来是饅頭」と前置きして、「即現觀音奴婢身 饅頭胡餅谷精神

旧時難忘見聞境 満目山陽笛裡人」と云う。市川氏(中本氏も)の注には「觀世音菩薩が三十三応身の一つ、奴婢

の身を現じて、銭をもってきて胡餅を買い、買った手を開いたら饅頭であった」という故事を引く。これは〈江口〉の原形である江口の長者即観音という考えの基礎を理解するために参考になる。観音がその応身の一つとして江口の長者となっているという事が、普賢菩薩がそうであるよりも自然だと分かるからである。勿論、江口の長者の名が「観音」だということは、その前提になっている。

312 自然外道

自然外道

自然居士

大道廃時人道立

大道廃する時人道立つ

離出智恵義深入

智恵を離れ出でて義深く入る

管弦歌吹人倫能

管弦歌吹は人倫の能

風雨世間之音律

風雨は世間の音律

「自然外道」とは「あらゆる存在（一切法、一切万物）は因縁によらないで自然に有る」（岩波仏教辞典）とする説を唱える人を云う。十三外道・三十種外道の一。「自然居士」という名称はそもそもこの意味でのものである。ただし、自然外道が管弦歌吹とかかわるという説は「三論玄義」等を検しても管見に入らないので、この312・313―直接には312―は能〈自然居士〉を意識していると考えられる。なお、「自戒集」（2）参照。

313

聡明外道本無知

聡明の外道本無知なり

精進道心期幾時

精進の道心期すること幾時ぞ

天然無釈迦弥勒

天然釈迦弥勒無し

万巻書経一首詩

万巻の書経は一首の詩

331 金春座者歌

金春座者の歌

(吉)(中)

唱得雲門王老禪

唱へ得たり雲門王老の禪

朝遊東土暮西天

朝に東土に遊び暮に西天

震旦徑山上堂後

震旦徑山上堂の後

建仁擊鼓法堂前

建仁鼓を撃つ法堂の前

第一・二句については中本氏の解説がある。第三・四句は臨濟宗の中心である中国の徑山寺・日本の建仁寺を挙げているので、臨濟宗の正統を受け継いで禪を知り、能を演じているということか。

345 紹固喝食

紹固喝食

〔西行物語絵巻・詞書〕久保家本)

四歳女兒歌舞前

四歳の女兒歌舞の前

(いとをしくおもふ娘の、四になるが……すぎにしかた、

約深難警旧因縁

約深く警め難し旧き因縁

出家を思とゞまりしも、このむすめのゆへなり「五段」

棄恩入無為手段

恩を棄つるは無為に入る手段

奇恩入無為は如来之教……と観じて「四段」)

座主作家誰是禪

座主の作家は誰か禪ならん

西行説話は能に成りやすい。「西行物語」のこの前の部分、佐藤義清が鳥羽殿で十首の屏風歌を詠んで、面目をほどこしたという説話は貞和五年春日社臨時祭の巫女能の題材になっている。ここも感動的な場面であり、一休時代の田楽・猿楽の能に作られていた可能性はあるだろう。紹固は「狂雲詩集」234参照。

〔狂雲詩集〕

216 金春太夫市原小町之能

金春太夫市原小町の能

通小町

(吉)(中)

名譽金春禪竹蹤

名譽金春禪竹が蹤

吹歌台上月溶々

吹歌台上月溶々

われは曇らじ心の月、……月には行くも暗からず

目前小町風流面

目前の小町風流の面

深艸幽魂袒跣容

深艸の幽魂袒跣の容

君を思へば徒歩跣足（少将）

吉田・中本両氏の解説がある。「金春禅竹蹤」は禅竹の子宗筠をさし、「吹歌台上」とある事から舞台上の演技を見ていることが分かる。「市原小町」は廃曲の曲名に見えるが、これはやはり〈通小町〉（四位少将）のことであろう。

231題松風村雨三首

松風村雨に題す三首

松風（松風村雨）（吉）

建帽敗絹取捨愁

建帽敗絹取捨の愁

おん立烏帽子狩衣を……捨てても置かれず、取れば面影に

恋衣袖湿総無由

恋衣袖湿れて総（て）由無し

松風も村雨も袖のみ濡れて由なやな

野村松樹二娥涙

野村の松樹二娥の涙

須磨の浦わの松の行平……磯馴れ松の懐かしや

風雨精魂夜々秋

風雨（の）精魂夜々の秋

（松風村雨二人の女の幽霊）

第一句などは能の詞章をそのままに取ったために、いかにも苦しい表現になっている。立烏帽子を「建帽」、狩衣が「敗絹」。これは能の詞章通り「たてえぼしかりぎぬ」と読むほかはないであろう。

332

可憐二女一身吟

憐むべし二女一身の吟

これは……松風村雨二人の女の、幽霊（二人同吟）

但仰神扶波上心

但神の扶けを仰ぐ波上の心 心狂気に馴れ衣の……神の助けも波の上

悩乱秋風恋艸露

秋風に悩乱す恋艸の露

恋ひ草の、露も思ひも乱れつつ、心狂気に馴れ衣の

烟波万里涙痕深

烟波万里涙痕深し

第一句は二人が同吟していることを指し、第二・三句は詞章をそのまま取る。

須磨風物は君恩

須磨の風物は君恩

行平……須磨の浦、夜潮を運ぶ海人少女に、おととい撰はれ

此地何須弄魄魂

此の地何ぞ須ひん魄魂を弄するを 須磨のあまりに罪深し、跡弔ひて賜ひ給へ

村雨松風楚台淚

村雨松風楚台の淚

松風も村雨も、袖のみ濡れて由なやな、

朝雲殘夢月黃昏

朝雲殘夢月黃昏

夢も跡なく夜も明けて

第三首になると詞章を離れ、全体をまとめる表現となる。

234 紹固醉歌

紹固醉歌

龍田

龍田織錦蜀江流

龍田錦を織る蜀江流る

龍田川錦織りかく神無月の……紅葉をとづるうす氷を、

旅客無心吟渡頭

旅客心無うして渡頭に吟ず

龍田川、心もなくてわたり給はば、神と人との中や絶え

乾坤万里漚和上

乾坤万里漚和（の）上

天地治まる御代のめぐみ、……ひとへに当社の御故なり、

愛聴天然童女謳

愛し聴く天然童女の謳

（後シテ龍田姫）

紹固は喝食の名で、一休はこれを愛していたらしい。「狂雲詩集」の中でも、253「紹固喝食春遊」、254「紹固喝食頌」

などにはその愛寵のさまがしのばれ、「癖紹固二一首」と題する二首には、222に「奈良春日下松詞章」、323には「歌舞袖飄紅色綺」と見え、若宮おん祭に出たり、歌舞をしたり、芸能に携わっていることが推察される。その紹固が酔って謡ったのが能〈龍田〉だったということであろう。第二句はワキ旅僧が龍田川の川辺で「龍田川紅葉乱れて流るめり……」の古歌を詠じたことをいう。

235 錦木

錦木

錦木

（吉）（中）

錦木立時毎日新

錦木立つ時毎日新たななり 三年まで立て置く数の錦木を、日毎に立てて千束とも詠み、

薄衣細葛不藏身

薄衣細葛身を藏さず また細布は機ばり狭くて、さながら身をも隠さねば、

鬱襟要啓胸難合

鬱襟啓かんと要して胸合ひ難し 胸合ひがたき恋とも詠みて、恨みにも寄せ、

夕日影中恋慕人

夕日影中恋慕の人 夕日の影もにしきぎの……内は輝く灯し火の、影明らかなる

これは第四句まで詞章の関連が見られる。

236 葦刈舟

葦刈舟

芦刈

(吉)

笋笠蓑衣歌吹工

笋笠蓑衣歌吹工みなり 雨に着る田蓑の……、露も真菅の、笠はなどかなからん

生涯一棹客船空

生涯一棹客船空し 眺めに続く難波舟の出で浮かみたる

十年愁夢風流妾

十年(の)愁夢風流の妾 三年の過ぎしは夢なれや、……わらはこそこれまで参りて候へ

驚起難波一夜風

驚き起す難波一夜の風 難波の春は夢なれや、芦の枯れ葉に風渡る、

第二・三句が特に問題になる。第二句の表現からすれば、シテ日下左衛門は舟に乗って登場してきたように見える。題も「芦刈舟」である。古型付、現在の演出ともに舞台に葦刈りの舟を登場させることはないが、所は難波の浦でもあり、歌語「葦刈り小舟」としても実景としても存在していた舟を出す演出が存在していたと見たい。第三句「十年」は問題である。能詞章は「三年」である。原話というべき「大和物語」や「今昔物語集」「源平盛衰記」の説話では、その年限は記していない。『室町時代物語大成』所収の「あしやのさうし」は能に近い説話だが、そこでは七年以上が経過している。「十年」はまとまって長年月ということを表現しているだけと考えることもできるが、十年とする演出もまたあり得たとも言えよう。

237 尺八

尺八

尺八の能(楽阿弥―天理本狂言六義)

因憶宇治菴主曾

因って憶ふ宇治菴主の曾

(あのうちのらうあんじゅの尺八のじよにも)

飢腸無酒冷於氷

飢腸酒無く冷（きこと）氷よりも冷まじ

明皇天上羽衣曲

明皇天上羽衣の曲

偶落人間慰野僧

偶人間に落ちて野僧を慰す

尺八は一休が好んだものの一つで、「狂雲集」の69「尺八」（「没知音」の語がある）、「狂雲詩集」76「題頓阿弥吹尺八像」、²²¹「月夜長睡 聴睡室尺八有感」などの作があるが、これは第一句から見ても、田楽能を詠んだものである。狂言〈楽阿弥〉と同じく、ワキ旅僧が尺八を吹いて吊っていると尺八吹の亡霊が現れ、玄宗皇帝ゆかりの霓裳羽衣の曲を奏し、ワキ僧の心を慰めるといふような筋が想定される。

238相坂蟬丸藁屋

相坂蟬丸の藁屋

蟬丸

柴門雲外六龍車

柴門雲外六龍の車

足弱車忍路を、雲井のよ所にめぐらして、

筥笠孤筇又緑蓑

筥笠孤筇又緑蓑

蓑……笠……杖

藁屋調高天上曲

藁屋調べは高し天上の曲

是なるわらやの内よりも、ばち音たかき琵琶のねきこゆ

清寒声夜々琵琶

清寒の声夜々の琵琶

琵琶の音を、引ならしく

「六龍車」は天子の乗用である。〈蟬丸〉の冒頭は「延喜第四の皇子蟬丸の宮」が逢坂山に捨てられるという場面だから、まだこう表現してよい。第二句は皇子の姿から蓑笠杖の姿に変わること、第三句はそこで琵琶を弾くことである。能の進行に即して描写が進んでいる。

239山伏峯入谷講猿楽二首 山伏峯入り谷講猿楽二首 谷行

（吉）

頓巾鈴掛正僧形

頓巾鈴掛正に僧形

小童思ひの外、峯入の姿山伏の、兜巾篠懸苔の衣、

有馬不騎只步行

馬有れども騎らず只步行

唯孝行の心力に、馬はあれども徒歩に行く、

禅鬼葛神扶不得

禅鬼葛神（の）扶（け）も得ず（谷行とて忽ち命を失ふ事、これ昔よりの大法なり）

人々悲別已吞声

人々別れを悲しんで已に声を吞む 心を傷め声を上げ、皆面々に泣きゐたり、

松若が母の現世を祈ろうと師匠とともに峯入りをする。まずその姿と道行して行く所が引かれる。第三句は松若が病氣になって作法通り谷行に行われようとする所である。禅鬼（役の行者に使役される鬼）・葛神（葛城山の神）などは後場で言及されるので、ここは中本氏の「扶くるも得ず」という訓みは採用しない。

240

遠入峰山伏正伝

遠く峰に入る山伏が正伝

（峯の巖の苔衣、かたしき初むる葛城の露こそ宿り）

所経道路幾山川

経る所の道路幾山川ぞ

恨深万仞断崖底

恨みは深し万仞断崖の底

邪見の剣身を砕く心をなしてかの人を、峻しき谷に陥れ、

初発風流美少年

初めて発く風流美少年

上なる土を……静かに返してかの小童を恙もなく抱き上げ

第一・二句で葛城山一の室までの遠い道を叙する。第三句で険しい谷底に埋められた松若を思い、第四句で役の行者の使者伎楽鬼神が松若を助け出したことをいう。前の二句で前詩で描いていた行程をまとめ、後の二句で引き続き場面を叙している。

241題市原小町二首

市原小町に題す二首

通小町

（吉）（中）

寂寞塔婆建市原

寂寞塔婆市原に建つ

（是をのの小町の墓所なり）市原野に行き小町の跡を弔はばや

為僧拾菓旧精魂

僧の為に菓を拾ふ旧精魂

女性一人、毎日本の実爪木を持ちて来り、この僧に与へ候、

浅洒秋風深草涙

浅洒たり秋風深草の涙

引かるる袖も、控ふるわが袂も、ともに涙の露、深草の少将

丘山千歳雲雨痕

丘山千歳雲雨の痕

これも二首続いて能の場面を追っている。第一句は問題があるところで、市原野に小町の塔婆が建っているという演出は型付類には見られない。括弧内に引いた車屋本の詞も「小町の歌なり」の誤りらしい。ただ、ワキ僧は市原野で「座具をのべ、香をたき」弔うので、その目当てとして小町の亡霊が出現する卒塔婆の作り物が舞台にあるという演出は可能であろう。小町は卒塔婆（塚）から、深草の少将は幕から登場すると考え、そのための作り物が初めから舞台奥に置かれていると見るのである。なお、『未刊謡曲集』八所収の〈市原小町（魂祭小町）〉には小町の卒塔婆はあるが、木の実拾いはない。第四句は宋玉の「高唐賦」に見える「雲雨巫山」の故事によって二人の男女の交情を偲んでいる。

242

女姦邪路仏難扶

女姦邪路仏も扶け難し

（三瀬川に沈み果てなば……たもとを取つて引きとどむ）

遺恨情窮泪洒途

遺恨情窮まって泪途に洒ぐ　ともに涙の露、深草の少将よ、

可憐疎懶百宵約

憐れむべし疎懶百宵の約　思ひもよらぬ車の榻に百夜通へと偽りしを、

承露君恩一滴無

承露の君恩一滴も無し　飲酒はいかに、……戒めならば保たんと、

第一句は少将が小町の成道を妨げようとすることで、第二・三句が詞章を引いているところである。第四句は〈通町〉そのものが分かりにくいところである。あるいは「小町の真心は少しも受けなかった」という意味かもしれない。

243 純老睦室親子約

純老睦室親子の約

鳥頭（善知鳥）

夢裡平生男色愁

夢裡平生男色の愁へ

鳥頭瀟洒没風流

鳥頭瀟洒として風流を没す（今はうとうの音に泣きて、やすかたの鳥の安からずや）

豈是疑真箇親子

豈是疑はんや真箇親子かと（疑ひも、夏たつけふの薄衣）

愛河深処水悠々 愛河深き処水悠々

睦室はさきに引いた241「月夜長睡 聴睦室尺八有感」にも見える。これは親子の契りを描いた能〈鳥頭〉が思い合
わされたという程度のかかわりであろう。

244 志津賀

志津賀

二人静

佳名美營業驚人

佳名美營業人を驚かす

静にてわたり候はば、隠れなき舞の上手にてありしかば、

拍々高歌一曲新

拍々高歌一曲新たなり

履馥落花芳艸道

馥りを履む落花芳艸の道

花を踏んでは同じく惜しむ少年の、春の夜も静かならで、

風流艷色少年春

風流艷色少年の春

騒がしきみ吉野の、山風に散る花までも……急ぐ山路かな

「静」と言えば〈吉野静〉もあるが、それには第三・四句の表現がない。この〈二人静〉が二人の相舞であったかど
うかは、これだけでは判断できない。

245 愛寿

愛寿

忠信（舞芸六輪「花伝髓脳記」所引）、愛寿忠信？

心澄河内自然清

心澄めば河内自然に清し

起浪吹風御法声

浪を起こし風を吹かしむ御法の声

慈悲満行観音寺

慈悲満行の観音寺

月白今宵愛寿盟

月は白し今宵愛寿の盟

〈愛寿〉といえは〈愛寿忠信〉が思い合わせられるのだが、それでは第四句「今宵愛寿盟」しか重なってこない。

「舞芸六輪」（「花伝髓脳記」所収）（国語国文学研究史大成8『謡曲狂言』一九九頁）に

一、たゝのふ。シテハかつちう、袖なし、はつひ。ワキ、おとこ三人出る也。あひしゆ女出る。僧これも谷の住

僧也

という記事がある。田中允氏編『未刊謡曲集』十九の「各曲解題」〈愛寿〉にこの記事を引き、「忠信の愛人愛寿が出るから、現行忠信の原型か類曲らしく、この曲を敷衍して本曲が出来たのかも知れない」と述べられる。詞章が不明なので確言はできないが、「僧」が出るところからは〈愛寿〉〈愛寿忠信〉ではないはずなので、場が河内で忠信・愛寿・僧の登場する能を想定したい。

264題松風村雨二首

松風村雨に題す二首

松風（松風村雨）

情尽秋風海遠天

情は尽く秋風海の遠き天 心づくしの秋風に、海は少し遠けれども、

行平好仇夜遊前

行平の好き仇夜遊の前 行平三年の程、……おととい選はれ参らせつつ

恨多取捨狩衣帽

恨みは多し取捨（す）狩衣（と）帽 おん立烏帽子狩衣を……いや増しの思ひ草、

月色江声共一船

月色江声共に一船 おんつれづれの御舟遊び、月に心は須磨の浦、

〈松風村雨〉に取材した作は五首にのぼる。一休の関心の深い曲だったことが推察されるのだが、これは次の一首について記した蛾皇女英との関わりが一休の関心をかきたてたと考えられよう。

365

曾為行平作好仇

曾て行平の為に好き仇を作す さても行平三年の程、……おととい選はれ参らせつつ、

恋衣袖湿総無由

恋衣袖湿れて総（て）由無し 松風も村雨も袖のみ濡れて由なやな

風流二女黄陵涙

風流二女の黄陵の涙

風雨精魂夜々秋

風雨精魂夜々の秋

「黄陵」は「狂雲詩集」183からの「黄陵廟十五首」と題する一連の作をみれば分かる通り、舜の妻である蛾皇と女英

の二人の廟である。この姉妹は舜が崩じたとき、湘水に身を投げて死んだ。一人の男を愛した姉妹という点で共通している。一休はその連作の中で「黄陵夜夜二妃吟」(193)・「涙湿二妃紅錦袂」(197)とも詠じており、松風村雨と蛾皇女英の二組を重ね合わせていることは確かである。この詩の第二・四句は265と重なり、第三句も同想である。

266 金春八郎羯鼓

金春八郎羯鼓

東岸居士

(吉)

美譽男色遊五橋

美譽男色五橋に遊ぶ

自然居士の……渡し給ひし橋なれば、今またかやうに勧むるなり

恰如彩鳳舞丹宵

恰も彩鳳丹宵に舞ふが如し

東山京洛愁吟客

東山京洛愁吟の客

(所は名に負ふ洛陽の、眺めも近き白河の)

腸断風流羯鼓腰

腸は断ゆ風流羯鼓の腰

心留まつて腸を断ち、……鼙八撥うち連れて、

金春八郎は「元安禅鳳」である。この詩は吉田氏が「今按、此八郎は七郎元氏の幼名にて、羯鼓とは其羯鼓を遊ぶ曲なるべし。望月、放下、花月、自然居士などに羯鼓あれば、それらの奏曲を観ての作歟」と推測されたものだが、『金春古伝書集成』の解説では「八郎元安(禅鳳)の花月の能を見ての詠作と思われる」と修正されている。禅鳳の能ということは従うべきだが、〈花月〉はいかがであろうか。共通点は羯鼓と全体の華やかな雰囲気だけで、第一句の「五橋」(五条橋)は〈花月〉には見えないのである。従来は吉田氏の「其地に演奏したる也」という解によって演能の場と考えられていたが、私は能の詞章の中にあるものと見たい。そうすると〈自然居士〉〈花月〉と同様の風体を持つシテの登場する〈東岸居士〉が想定できる。そのシテ東岸居士は喝食であり、「五条の橋にて、自然居士の御弟子東岸居士と申おかつしきの、橋の勧めを御沙汰候が、せつぼうを仰られ候て、色々面白く御くるひ候」(新潮古典集成所引の妙庵本)とあるように五条橋そのもので芸を披露し、羯鼓を打って舞う。よく適合しよう。第四句は詞章に相当する語はないが、「一遍上人絵詞伝」から作られたという「サシ・クセ」の気分は「愁吟」というにふさわしい。この

詩は当然禪鳳に与えられたであろう。八郎元安が永正十年（1513）頃に出家するに当たって、ややおおけない「鳳」字を用いたのは一休のこの詩における「彩鳳」の言葉によるのではなからうか。祖父禪竹・父宗筠ともに竹に縁のある文字を用いているのだから、禪鳳も竹関係の文字を用いてもよかった筈なのである。なお、「東海一休和尚年譜」応永二十七年条に「彩鳳舞丹宵」の句を用いた問答が記されている。

「自戒集」

（1）猿楽歌高笙熊舩

猿楽歌高し笙熊の舩

狗坊舞妙金牛禪

狗坊舞妙なり金牛の禪

棧敷此居養叟勸

棧敷芝居は養叟の勸め

要兄段錢又徳錢

要兄は段錢又徳錢

要兄は一休が罵っていた法兄養叟の嗣法である朝蔵主だと「自戒集」に見える。第一句が猿楽関係のものであるろうが、「笙熊」は文字違いで気付かなかったが、表章氏のご示教によって、榎並猿楽の「生熊大夫」と関わりがあると考えられる。『能楽源流考』一〇三二・三頁には『満濟准后日記』応永三十三年四月二十一日条、『看聞御記』嘉吉三年三月二十四日条を引き、一〇三六頁には金春安住の手記を引いて、「微々たる存在ではあったらうが、金春配下の一猿楽として、生熊の子孫が依然猿楽を業として居たであらう事を、想像する事は許されても良い」と述べられている。この「笙熊」はその想像された「生熊」の事であろう。第二句との関連はわからない。

（2）舞台自然居士舩

舞台は自然居士の舩

居士風顛頗似禪

居士の風顛頗る禪に似たり

八景歌罷打腰鼓

八景の歌罷みて腰鼓を打つ

小鼓許不直多錢

小鼓許り多錢に直はず

この詩については小稿「作品研究自然居士」(『観世』昭五六・11)において論じた。詠まれている内容は〈自然居士〉の後場であって、自然居士が人買い舟に乗り込んでからの場面である。第三句が問題であって、「志賀唐崎の一つ松、つれなき人の心かな」に続いて現行の「船の曲舞」ではなく、瀟湘八景になぞらえた近江八景を簾で囃し舞ったあとで羯鼓の段になるものと考えた。詳しくは小稿に依られたいが、ここでは一っだけ補強しておきたい。万里集九の「梅花無尽蔵」第二に「万唐崎一樹松 風吹細浪貌如龍 伝聞景写湘南八 声送帆帆比叡鐘」という作がある。これは長享二年(1488)の作とされているので、明応九年(1500)に定着した近江八景以前に瀟湘八景になぞらえた近江八景が想定されており、「唐崎の一つ松」がその景物の一つと意識されていたことが分かる。これを冒頭に置いた「八景の歌」が想定できるという根拠となしうるであろう。

参考

以下、「自戒集」に見える芸能関係の作を挙げておく。

(3) 新座本座好々風 小鼓上手能一中 上肩拍々莫洗腋 南都神事録物洪

これは田楽である。「能一」については、これも表氏のご示教によるが、香西精氏に考証があり、『続世阿弥新考』に世阿弥が用いた用例について、「堪能第一」の意に解されている。思想大系『世阿弥禅竹』の補注110もこれを支持している。「上手能一」という表現は、その解に適合している。第三句は「肩に上る拍々腋を洗うなし」と読んで、「軽業事のリズムが迫力がなく、腋の下に汗をかかない」と解しておく。

(4) 狗於人兮人於狗 田楽得法忘舞手 大鼓尺八総根推 斟酌参禅刀玉取

田楽ノニアミト云者得法タテヲシテ、同例ノ田楽トモヲ接得ス。

これも田楽で、「刀玉」は今も行われる田楽わざである。

(5) 夫東路婦西路船 田楽参宿接待禅 二阿推参々禅頬 徒買法費能分銭
第一句は田楽能の一場面であるのかもしれない。

(6) 一休会裏五種行

一二ハ傾城乱 一二ハ若俗狂 一二ハ酒宴 一二ハ田楽節猿楽節并尺八 一二ハ口宣舞

この記事をどう評価するか、この後に「此五種行ノ頌ハ、(中略)養叟サカイニテノ五種行ノ無住榜ヲ御覧シテ、腹立ノ余トウケタマワリ候」とあることからすれば、実態よりもオーバーに表現されているとも言えようが、これらはそれぞれに根拠があることと私は考えている。当面問題となる「田楽節・猿楽節并尺八」は確かに一休が好むものだった。

(7) 高歌源平合戦船 因憶伏虎將軍禅 閑松舞罷太四立 舞兒産扇不産銭

これは田楽か猿楽か判断出来ないが、源平合戦に取材した能であることは間違いないだろう。「閑松」・「太四」は役者の名であろう。

(8) 吹来信比丘尼風 入申大用奥寮中 若衆不期放参過 抜放裸鹿三束洪

ナカムカシ、京ワランヘノコウタニイワク、御僧ナウく比丘尼風カファイテキタ、イレマウセくヨクノ寮ヘイレマウセ、放参スキテキマウサウ。大用ハ養叟か菴号也。

これは能に關係の無い、本当に参考である。付記される小歌がそのまま詩句に用いられることを証する良い例として引いておいた。

能の作者別一覽

一休の詩・頌に引かれていた能を作者別に一覽すると次のようになる。作者不明のものも含めて古い作品が題材になっっていることが分かる。

観阿弥 自然居士(世阿弥)・通小町(大和の唱導、世阿弥)

世阿弥 山姥・江口(観阿弥)・松風村雨(《汐汲》喜阿・観阿弥)・錦木・芦刈舟(《難波》亀阿弥)・蟬丸

金春禅竹 龍田・谷行・忠信?

その他 二人静(世阿弥周辺)、愛寿(観世十郎)

作者未詳 尺八(田楽)・鳥頭・東岸居士

演能記録あるいは観能記録として

一休の生没年は明德五年から文明十三年である。能勢朝次氏の『能楽源流考』所収の「演能曲目調査」によれば、一休没年の文明十三年以前、一休詩・頌に引かれている曲が上演されたという記録は次の通りである(補正した部分は括弧内に典拠を示す)。まず、記録のある曲とその初出年を引く。世阿弥・禅竹ら演者側の伝書に記されているのは除く。

山姥—寛正5 (1464)、江口—長享2 (1488)、自然居士—永享4 (1432)、通小町—寛正5、松風村雨—享徳1 (1452)、錦木—享徳1、二人静—寛正5、尺八—文安1 (1444)(文安田楽能記)、計8。

次に、記録のない曲とその初出年を記す。

龍田―天文1 (1536)、芦刈―明応4 (1495) (実隆公記)、蟬丸 (逆髪も)―なし、谷行―天文15 (1546)、鳥頭―永正2、忠信―なし、(愛寿―天文15)、東岸居士―天文12 (1543)、計7。

以上通覧したところで、一休の詩・頌に取り上げられていることの意義が判明しよう。世阿弥・禅竹らの伝書に記されて存在が確認されているものでも、以後永い期間にわたって演能記録が無いのである。これは能が楽しみの対象であって、とりわけての必要がなければその曲目までは記録しようとは思われなかったことが、第一の原因であろう。そういう中で、一休以前に記録のあるもの八曲はまだ良いが、記録のないもの七曲については貴重な記録と言うべきなのである。そして、一休が一曲のどの点に興味を持ったのか、享受の記録の代表的な一つと数えて良いはずである。また、それぞれの項で記したように、今では伝わらぬ本文・演出を想定できるところは、例えば『禅鳳雑談』に見える異なる演出なども考え合わせれば、簡単には否定できない筈であり、今後の考究を要するところなのである。

付記

本稿は「研究十二月往来49 一休宗純の詩と能」(『鎮仙』291昭五六・10)、「同51統一休宗純の詩と能」(同293昭五六・12)の二稿を併せ改稿したものであって、第四六回和漢比較文学学会東部例会(平七・1・28)において研究発表したものである。

島津忠夫氏「一休と芸能」(『国文学』平四・12)は一休と能を含む芸能との関わりを指摘し、本稿では触れなかった「底流につながる影響」について考察されている。